えば、宗教心を意味する「敬虔」とは、感情の形態における、直接自己意識の経験であると見ることが出来であろう。従って、宗教感情は日常的な単なる感動、或は知覚的、感覚的意識とは質的に区別されるべきものである。それは、全存在（宇宙）と一体であり且つ生命の根源的同一性を感ずる事実のうちに平安と浄福を見い出すところの自己意識の最高表現であり、また宇宙が人間のうちに意識的になろうとする宇宙の自己表現と解される。このように人間存在にとって本質的なる感情のうちに宗教意識の形態を見い出していることも『宗教論』の基本的立場である。

以上、宗教的生と真理の直接的表現とその直接的感得とを企図して、「経験」（宇宙の直観）と「感情」とを以て宗教性を構成する本質的な要素と考える宗教理解を、『宗教論』の基本的な立場と見ることが出来るであろう。

近世美作地方の大峯山上講

――苫田郡阿波村の講資料を中心に――

豊島　修

近世の地方庶民（＝農民）生活に、山伏・修験の活動や指導が大きな役割をはたしたことはよく知られている。殊に美作地方は、法印と呼称される村落修験の活躍が顕著であったことが窺える[1]が、今彼等の宗教活動や指導によって、江戸時代、美作の村落に組織された山岳信仰的な講の一である大峯山上講をとりあげ、特に苫田郡阿波（アバ）村の講資料[2]から、阿波村の大峯山上講の組織形態や内容、及び宗教的目的と機能などにつき、少しく考察したい。

中世末期に於いて、それまで山岳抖擻（や入峰修行）を生命とした山伏修験の徒が、大和国の大峯山（山上ケ岳）で儀礼化した入峰修行をおこなう一方、大峯参詣の信仰組織を確立して、一部の信者を大峯山へ登拝させていたことは中世の諸記録に窺えるところである。この大峯山上講（行者講）は、近世に至ると村落化、定着化した山伏修験の指導と吉野一山側の働きかけによって、畿内地方の村落に組織され、その後地方へ発展し固定化したと考えられる。その過程については宮家準氏の所論[3]に譲るが、江戸時代、大峯山に近い畿内の大和から摂津・河内地方にかけて、大峯山上講や行者講が十七世紀頃に数多く組織され、また各講から毎年代参者を大峯山へ送っていたことが知られる[4]。これは中世において、吉野・金峯山などを修行場とする職業的山伏によって

組織された一部の信仰（厳助往年記等）が、近世期に村全体の信仰へと変ったもので、いわゆる中世的な「信者講」が近世的な「地域講」へと変遷したことを示すと解される。

ところで、美作地方の大峯山上講（行者講）の成立時期は明確でないが、管見では宝暦二年の『和州大峯山上大権現行者講日記』（石原家文書・以下講日記と略称）を有する苫田郡阿波村の大峯山上講が古く、その他同郡加茂町行重村や真庭郡美甘村の大峯山上講なども、天保年間頃まで確実に大峯山へ代参者を送っていたといわれる。いずれも畿内一円に組織された大峯山上講の創立時期より幾分おくれるが、それでも江戸中期頃には美作の村落に簇生していたと考えてよい。それは富士講や出羽三山講のみならず、戸隠講や三峯講などの地方的修験霊場を登拝する講とその成立時期を大体同じくしており[5]、近世の地方村落における山岳信仰的な講の一般的な成立形態であったといい得るように思われる。

さて、苫田郡阿波村の大峯山上講の実態について、『講日記』などの資料から窺ってみると、第一に注目したいのは、阿波村の山上講を構成する組織と信仰範囲である。即ち講の発起人である先達石原浅右ェ門を中心に、預頭と講連中二十一名の計二十三名から構成されていた。更に天保三年の講文書によれば、この年あらたに講帳を改めて四十四名の講員を記している。そして同年以降は、ほとんど講員の移動がみられない安定した信仰集団であった。また講の信仰範囲に注目すると、阿波村の下沢・竹ノ下・大杉・大高下の四部落のほか、隣村の河井村と加茂町青柳・中塔・中村などを含む、五ヶ村以上（講日記）からなる大がかりな信仰組織であったことは留意される。このような数ヶ村連合の講組織については、同郡加茂町行重村を中心に組織された「永代護摩講」（永代大護摩帳・天保十五）にも認められる。これは阿波村や行重村に組織された大峯山上講が、近世末期頃には地域利害をうけることなく、広い地域を結合の基盤においていたことを示すもので、狭義の宗教的な結合をなしていた民間信仰的大師講や山の神講[6]などとは異なっていたことに注意されよう。また講の指導者である先達石原浅右ェ門は、同家の過去帳や柴燈護摩符などによって大峯山の先達山伏であったことが認められ、阿波村の大峯山上講は専門の宗教者である大峯修験によって講が組織され、維持されたところに特徴があるといえよう。

次に講日記などから、阿波村の大峯山上講の内容や宗教的目的について窺ってみたい。まず山上講の内容については、講日記に「前講儀年中拾弐又講密会起居」云々とあり、毎月六日（講日記）先達を中心に、預頭と講員が集まり講会をもつ方式で、その時「一会六銀宛持参」する定めであったことが知られる。また先達石原家には慶応三年調べの「絵参箱」があり、その中には法螺貝、錫杖、鈴などとともに、不動の掛軸が納められている。従って一連の講記録には直接記されていないが、江戸時代にこの掛軸を本尊として掛けられ、講会が営なまれたものと思われる。では、この山上講の宗教的目的はどこにあったのだろうか。宝暦二年の講日記の「定」には、「万諸相鎮」「連中安全」「息災延明」「五穀成就皆令満足」とあり、講中の安全や息災延命、五穀成就などの諸願成就を目的としていたことが知られるのである。先に

触れた加茂町行重村の永代大護摩講においても、天保十五年八月、備前児島の五流山伏太法院へ宛てた講員の祈願文に「講中家内安全・五穀成就・牛馬繁昌」（岡田家文書）のためとみえて、いずれも講中の安全・招福と農耕生産の増殖を祈願の基底として成立していた。このことは更に、近世末期以降美作の村落に組織されていた後山（ごせん）山上講にも認められるが、このような農耕生活の進展と現世利益的な信仰を求める意識は、富士講や戸隠講などにおいても指摘されており⑦、近世の地方村落における山岳信仰的な講集団の一般的な信仰形態であったと考えられるのである。

ところで、このような阿波村の大峯山上講の機能がどのようなものであったか。講日記などから、㈠部落内の不動堂で、毎年二・六月の六日に講会をもつ方式、㈡講員の中から代参者が選出され、直接大峯山へ登拝していたことを指摘し得ると思われる。この点については詳しく論及できないが、大峯代参の機能については、既に近世初頭以来、畿内地方一円に組織された大峯山上講や行者講の著しい特徴の一つであったことは先述した如くである。阿波村の大峯山上講においても、天保三年の講記録に「代参木ノ下　値之助」とあり、時代は降るが、明治四年七月十八日の講帳にも、河井村の野瀬八十吉が「惣代参」したことが記されて、近世以来講中から選ばれた代参者が、講の先達と直接大峯山へ登拝していたことを知るのである。これは一に、籤によって選出された代参者が、夏の峯入りの一環として、毎年七月大峯山上ケ岳でおこなわれる「大峯山上柴燈護摩修行」に付随して、護摩供養札を頂くことにあったものと思われる。これを裏付ける資料として、宝暦四年から文久元年の年号を有する「大峯山上柴燈護摩供息」札（石原家所蔵）があげられるが、またこの護摩札の一部に「講中家内安全・五穀成就」とあるのは、この大峯代参の宗教的意図がどこにあったかを示すものとして注意しておきたい。

上述の如く、近世阿波村の大峯山上講は、大峯修験の指導のもとに、大がかりな信仰組織であったところに特徴があるが、村落における機能や代参の機能が認められる。更にその宗教的目的である農耕生産の増殖と現世利益的な信仰も窺えるが、このような農耕生活に即した現実の信仰は他地方の山上講にもみられるもので、あくまで近世の地方村落における一般的な信仰形態であったといえよう。もっとも阿波村の山上講が、当時部落祭祀や庶民信仰とどのように結んでいたのかという問題や、美作を含む他の地方の山上講などとの精密な比較検討が必要であるが、それについては後日に期したい。

註

(1) 『美作の民俗』（昭和38）。拙稿「美作修験と後山信仰」（『印度学仏教学研究』20巻一号）。

(2) 以下、石原一男家所蔵文書による。

(3)(4) 「山伏―その行動と組織―」（『日本人の行動と思想』29、その他。

(5) 桜井徳太郎氏『講集団成立過程の研究』（昭37）。宮田登氏「代参講の一考察」（日本宗教史研究』5）。

(6) 『阿波・梶波の民俗』（昭46）。

(7) 註(5)に同じ。